

第37回におい・かおり環境学会への参加報告

池田四郎

株式会社ガステック 〒252-1195 神奈川県綾瀬市深谷中8-8-6

A Report on 37th Annual Conference on Odor Environment

Shiro IKEDA

Gastec Corporation, 8-8-6 Fukaya-naka, Ayase-city, Kanagawa 252-1195, Japan

1. はじめに

2024年8月29日(木)~30日(金)の日程で、第37回におい・かおり環境学会が開催され参加してきたので報告します。会場は、東京メトロ南北線の「東大前駅」からほぼ直結の文京学院大学でした。超ノロノロで話題となった台風10号の影響で天候が不安定となった2日目を含む日程でしたが、多くの演題が発表され、活発なディスカッションが行われていました。

におい・かおり環境学会を主催する公益社団法人におい・かおり環境協会（Japan Association on Odor Environment, JAOE）は1969年に悪臭公害研究会として設立されたように、高度経済成長期における公害のうち悪臭分野に焦点を当ててスタートしました。1987年より社団法人臭気対策研究協会、2008年から現在の協会名となっております。国家資格である臭気判定士試験等の実施や臭気判定士免状の交付を行っている機関としてもよく知られています。におい・

かおり環境学会誌の発行やにおい・かおりに関する相談受付、各種研修会やセミナーの開催なども行われています。様々なにおいに関する研究や事例等を発表する場として、毎年6月~8月頃にはにおい・かおり環境学会が開催されています。においに関する国内外の研究者、企業の方が一同に会し、併設される機器展示会ともあわせて最新情報を収集できます。

2. 研究発表について

一般発表は口頭およびポスター発表に分けられ、口頭は「分析・測定」、「室内・体臭の測定評価」、「かおりの評価」、「官能評価」の各テーマに分類されており、合わせて21件の発表がありました。ポスターは全24件の演題があり、初日に13件、2日目に11件が1分間の口頭発表つきで発表されていました。

「分析・測定」の分野ではGC-TOFMSやにおい嗅ぎGCを活用し、化粧品や農地土壌、柑橘類の



写真1 メイン会場の仁愛ホールにてステージを望む

おい成分の分析が試みられた結果などが報告されていました。農産物など製品品質の調査における非破壊試験に、おい成分が活用されようとしている印象を受けました。「室内・体臭」の測定評価の分野では、筆者が特に関心を持っているテーマが発表されたので、興味深く拝聴しました。室内環境学会の会員でもある先生方の発表も多く、今後コラボレーションや交流が盛んになり相乗効果が生まれそうな予感がしました。「かおりの評価」の分野は、おい・かおり環境協会における特徴的なフィールドだと感じられました。「におい」、「匂い」、「臭い」や「かおり」、「香り」などのキーワードが明確に区別して使われており、化学物質としてのおい成分の測定や挙動などの範疇にとどまらず、ヒトに対してどのような影響があるのかを明らかにしていくことが重視されている印象を受けました。しかも影響としては、毒性や悪臭といったネガティブ影響よりは脳の活性化やかおりの好ましさといったようにポジティブな効果の方に焦点が当たっていた印象です。この点、産業界にも多くの示唆やビジネスチャンスをもたらす可能性があり、また人々のQOL向上やウェルビーイングに寄与しやすい学問領域だと感じました。

3. 企画セッションについて

2日目の午後の時間帯には、企画セッションとして「におい・かおりの多様性 ～体臭などの悩みについて考える～」という討論会が、座長の小林剛史先生（文京学院大学）のコーディネートで開催されました。冒頭にも記載したように、おい・かおり

環境協会は、公害対策基本法が制定された1967年の2年後に研究会として発足し、1971年公布、1972年施行の悪臭防止法が業界に関係する法令でした。それから50年以上が経ち、学問分野としての多様化は今に始まったことではないと思われませんが、今回「体臭」に焦点が当たったことは興味深かったです。特に、基調講演の演題の一つには「体臭に対する悩み」が挙げられており、これまで学会としてクローズアップされてこなかった領域であると、座長より前説がありました。

思春期から永く体臭に悩んでこられた当事者による、実例についての講演から始まりました。続いての講演では、2012年に「自己臭」という用語が使われるようになり、自己臭と嗅覚認知能力、パーソナリティ特性との関連性について研究が進められてきた経緯が紹介されました。おいに対する主観的認知能力として、「においへの気づき度合い」と「嗅覚イメージ能力」に、パーソナリティ特性としてBig five（外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性）とHSP（Highly Sensitive Person）に焦点が当てられて自己臭との関連性が検討されてきたようです。非常にセンシティブなテーマが科学的、心理学的アプローチで研究されてきた一方で、体臭を多様性のある個性と捉えて、適切な体臭ケアを啓発して実践していく社会科学的な取組みも、別講演にて紹介されていました。学際的な観点で社会に発信されていくべきテーマだと感じました。

今後も協会会員諸氏の研究発展を刮目すべき、興味深い学会でした。